

ビワ生育情報

千葉県
平成30年3月号

平成30年2月の気象

平成30年2月の半旬別の気象は表1に示した。平均気温は第3及び第6半旬を除く4半旬で平年を下回った。月平均気温は6.0℃で、平年より0.3℃、前年より1.0℃低かった。

氷点下を記録した日は第1～第4半旬でみられた。月合計は7日で、平年より2日、前年より1日少なかった。最低極温は第2半旬を除く5半旬で平年より高かった。

降水量はすべての半旬で平年より少なく、第4及び第6半旬では降雨がなかった。月合計は21mmで、平年の22%、前年の72%であった。また、館山測候所では月降水量17.5mmを記録し、この値は2月としては過去50年で2番目に少なかった。

日照時間は第1、第5及び第6半旬では平年を下回り、第2～第4半旬では平年を上回った。月合計は161時間で、平年の106%、前年の87%であった。

表1 平成30年2月の気象（暖地園芸研究所）

半旬	気温(℃)			氷点下日数(日)			最低極温(℃) ^{※1}		
	本年	平年	前年	本年	平年	前年	本年	平年	前年
1	4.5	5.2	6.7	1	2.0	1	-0.4	-1.6	-0.2
2	5.1	6.4	5.7	3	1.7	1	-2.4	-1.4	-1.3
3	7.5	6.6	4.9	1	1.8	4	-1.2	-1.5	-2.7
4	5.9	6.2	10.0	2	1.5	1	-0.4	-0.9	-0.6
5	5.7	6.8	8.2	0	1.2	1	0.1	-0.5	-1.5
6	8.2	7.1	6.0	0	0.9	0	1.8	0.2	1.0
平均/計/最低値	6.0	6.3	7.0	7	9.0	8	-2.4	-3.0 ^{※2}	-2.7

※1：各半旬又は2月中に記録した最低気温

※2：2月中に記録した最低極温の30年間平均値

表1 (つづき)

半旬	降水量(mm)			日照時間(hr)		
	本年	平年	前年	本年	平年	前年
1	8	13	5	16	29	41
2	4	13	17	40	28	29
3	3	10	0	40	27	48
4	0	28	1	35	26	27
5	7	20	7	17	26	26
6	0	14	0	14	15	15
合計	21	97	29	161	152	185

樹及び花房の発育(4月の作業は次ページ)

ビワの開花期は表2に示した。暖地園芸研究所の開花始期は、「楠」が11月5日で、平年より4日早く、前年より1日遅かった。「大房」が11月19日で、平年より6日早く、前年より2日遅かった。「田中」が11月6日で、平年より7日、前年より1日早かった。開花盛期は、「楠」が11月23日で、平年より4日、前年より3日早かった。「大房」が12月11日で、平年より8日、前年より2日早かった。「田中」が11月22日で、平年より13日、前年より11日早かった。開花終期は、「楠」が12月13日で、平年より13日、前年より6日早かった。「大房」が1月16日で、平年より12日早く、前年より7日遅かった。「田中」が12月19日で、平年より21日、前年より8日早かった。

花房の出蕾は平年並みであったが、11月の気温が高かった影響で、開花は平年より早く終了し、幼果の発育が早く進んでいる。ビワの耐寒性は花より幼果の方が低いため、1月下旬の寒波によって寒害を被ったと考えられる。8～10月の日照不足の影響で樹及び花房の生育はやや悪い。また、10月下旬の台風通過後に潮風害を被り、落葉がみられた樹は樹勢の低下が著しい。そのような樹は果房数を少なくし、樹勢の回復を図る。

表2 ビワの開花期（暖地園芸研究所）

品 種	開花始期(月.日)			開花盛期(月.日)			開花終期(月.日)		
	本年	平年	前年	本年	平年	前年	本年	平年	前年
楠	11. 5	11. 9	11. 4	11.23	11.27	11.26	12.13	12.26	12.19
大 房	11.19	11.25	11.17	12.11	12.19	12.13	1.16	1.28	1. 9
田 中	11. 6	11.13	11. 7	11.22	12. 5	12. 3	12.19	1. 9	12.27

平年：昭和62年～平成28年の30年間の平均

3月1日時点のビワ幼果の生存率は表3に示した。なお、「大房」については、幼果の発育が遅れていたため、調査が出来なかった。樹冠外側の生存率は「楠」が41%、「田中」が34%であり、2品種共に平年及び前年より低かった。樹冠内側の生存率は「楠」が88%、「田中」が89%であり、2品種共に平年より低かったが、前年より高かった。樹内外の平均生存率は「楠」が64%、「田中」が62%であり、「楠」は平年より低かったが、前年より高く、「田中」は平年及び前年より低かった。

暖地園芸研究所では、2月28日までに最低気温が-3℃以下を記録した日が4日あった。ビワの寒害は花よりも幼果の方が被りやすく、本年度のビワは開花が早く終了したため、被害を被りやすい幼果の期間が長かった。その期間に気温の低下が起こったことで被害が発生したと考えられる。

花房内の幼果数は平年よりやや多いが、寒害が多いため、生存果数は少ない。果実の肥大は平年よりやや早く進んでいるが、「大房」はやや遅れている。萌芽の展葉も平年よりやや早く進んでいる。本年の果樹カメムシ類の越冬量は、南房総市他県南地域で多発年と同様の傾向を示すため、今後の発生予察情報を参考にする。また、カメムシの発生が例年多い園では、4月以降、ビワ園への飛来に注意を要し、千葉県農作物病害虫雑草防除指針に従って防除を行う。

表3 ビワ幼果の生存率（暖地園芸研究所）

品 種	樹冠の外側(%)			樹冠の内側(%)			内外の平均(%)		
	本年	平年	前年	本年	平年	前年	本年	平年	前年
楠	41	65	58	88	91	57	64	77	58
大 房	—	82	85	—	95	95	—	88	90
田 中	34	82	65	89	95	74	62	88	69

調査日：平成30年3月1日

平年値：平成10年～平成29年の20年間の平均

なお、表の数値は、表示単位未満を四捨五入したため、合計値と内訳の計が一致しない場合がある。

4月の作業

4月になると平均気温が一段と高くなって枝葉・根ともに伸長が盛んな時期になり、果実の肥大も急速に進む。3月に続き、摘果・袋かけが重要な作業になる。

摘果・袋かけ

寒害を受けやすい園では、幼果の生死の判別がしやすくなった頃から摘果を始める。果形が細長いもの、果実肥大が均一でないもの、果皮に張りが無いものは被害果の可能性が高い。被害果の発生が多い園では、樹冠の外側の幼果は避け、被害が比較的少ない樹冠の内側の幼果を多く残すようにし、収量低下を抑える。

がんしゅ病の予防

千葉県農作物病害虫雑草防除指針に従って、幼果期までに銅剤を予防散布する。その際、幹や枝にも薬液が十分にかかるようにする。

除 草

春草が繁茂する時期になるので、収穫が始まる前に除草を済ませる。草生栽培園では、有機物を補給する意味で草を刈り取って樹冠の回りに敷くとよいが、労力の足りない場合は除草剤を利用する。

【問合せ先：千葉県農林総合研究センター 暖地園芸研究所 特産果樹研究室 電話0470-22-2961】

※果樹の生育情報は「ちばの農林水産業」の「生育情報」でも御覧いただけます。

<http://www.pref.chiba.lg.jp/seisan/seiiku/index.html>